會報

昭和八年十月 | 29 | 日本山岳會

紙魚こぼれ

木暮理太郎

太田蜀山人の「半日閑話」の中に「信州淺間岳下寄談」と題して次の記事が出てゐる。

九月（文化十二年）頃承りしに、夏頃信州淺間ケ嶽邊にて鄕家の百姓井戸を堀りしに二丈餘も深く堀けれども水不出、さん瓦を二三枚堀出しけるゆへ、かゝる深き處に瓦あるべき樣なしとて又々堀ければ、屋根を堀當けるゆへ其屋根を崩し見れば奥居間暗く物の目不知去れ共洞穴の如く内に人間のやうなる者居る樣子ゆへ、松明を以て段々見れば年の頃五六十の人三人有之、依之此者に一々問ひければ彼者申やうは、夫より幾年か知らざれとも、先年淺間燒の節土藏に住居なし六人一同に山崩れ出る事不出來、依之四人は種々に横へ穴を明などしけれども、中々不及して遂に沒す。私二人は藏に積置し米三千俵酒三千樽を飲ほし其上にて天命をまたんと欲せしに、今日各々へ面會すること生涯の大慶なりと云けるゆへ、段々數へ見れば三十三年に當るゆへ其節の者を呼合ければ、是は久し振り哉、何屋の誰が蘇生しけるとか、直に代官所へ訴へ上へ上んと言けれども、數年地の内にて暮しける故直に上へあがらば風に中り死ん事をいとひ、段々に天を見そろり〳〵と上らんと言けるゆへ、先穴を大きく致し日の照る如くに致し食物を當かへ置し由、專らの沙汰なり。

此二人先年は餘程の豪家にてありしとなり、其咄し承りしゆへ御代官を聞合せけれ共不知、私領なとや又は巷說哉も不知。

天明の頃淺間山麓にそれ程の分限者があつたとも想はれないし、生米を醪り酒を飲んで三十三年も地中に生きてゐたとも考へられないが、また人の一人や二人が呼吸する程の熔岩の隙間がなかつたともいへないので、嘘のやうでもあり眞實のやうでもあつて甚だ面白い。然し事實は恐らく人家に堀當てた話などに花が咲き實が生つて大袈裟に傳へられたものであらうか。次は曳尾庵隨筆の一文で寛政十二年頃のことである。

日光山中の僧の修驗に成たる人の話に、先年日光中禪寺の湖船禪定とて船にて湖の所々拜禮いたし候處、其船くつかへりて乘合の人數不殘湖中へ溺死其死骸一人もみへ不申候由。又或人中禪寺の山へ女人來候ゆへ捕へ吟味いたし候處越後より山越に欠落いたし候山路に迷ひ此所へ來り候由申。元來中禪寺は女人禁制の場所といへ共みちなき處を來りし故、無是非彼女の頭に草履をゆひ付四つはひに這はせ山を追下し候よし、女には錢一貫文與へ追拂ひけるとなり。

中禪寺湖の水は比重の關係か何かで死體が浮かないので有名であるが水の性質は其頃も今も變りがないと見える。女は越後からどう山越しをして來たか、欠落者のやかましかつた當時隨分苦しい山旅を續けたことであつたらう。頭に草履をゆひ付四つ這ひに御はせて山を追下したのは頗る滑稽であるが、これは禁制の山へ上つたのは人間ではないのだといふ意味からであらう。

下野屋十右衞門を祇園といふ、大山參の納太刀を三間半程に捧へ、所の若い者四五十人に揃のゆかたみな〳〵に着せ、掛念佛にて大通り芝口より高輪へ差かゝり、自分は好のゆかた鮫鞘の大腰差て、ふとん重ねたる駕に乘り左右の戸をひらかせて、先達してほどなく品川の宿入口にさしかゝる比、跡より召捕の御役人方來りて、祇園を駕より引ずりおろし高手小手に縄を掛、同勢引返されて早速入牢に及ぶ、餘り大行成事身分不相應の旨御咎を蒙り、しばらくが間牢内に居るこそ珍らしけれ。

弘化三丙午春彌生の序ある「十八大通」の大山參納太刀」の一項である。大小の會旗を押立て振立てヨイショ〳〵と山へ押出す心持と古今の差こそ變りはない、祇園氏生れ時がわるくてお氣の毒であつた。

駿州富士山并相州大山參詣の者共御當地より東海道神奈川宿邊迄海上船にて罷越候に付、旅籠屋并商人共助成薄く雜儀致候に付、船往來差留之儀品川宿より願出候。右躰御當地より乘船致し神奈川宿邊え着船致候儀は、脇往來も同樣之儀、是迄迚も海邊附村々え船往來差圖（留か）之儀度々觸有之候。御當地河岸之の船持共右之段相心得

主要目次

★紙魚こぼれ……木暮理太郎（一）
★各國山岳會の近況……黒田孝雄（二）
★遭難報告に就ての希望……瀬木三雄（四）
★山岳研究講話 6……今西錦司（五）
★山の消息……（六）
臺灣より　清津川遡行佐武流
山白砂山　新設山小屋栂池ヒユッテ　秋山のニュース
★登山團體調査……（六）
秋田湯澤山岳會　武藏高工山岳部　門司山岳協會　三重高農山岳部
★圖書紹介……（七）
陸地測量部新刊目錄　千島の氣象に關する文獻　山想 4　立教大學山岳部々報 5
★會務報告……（七）
九月定例理事會　評議員會
役員總會　十月定例理事會
新入會員　退會者　住所變更
新着圖書
英國山岳會寄贈幻燈板目錄…（八）
山小屋建設に關する報告……（九）
有志晩餐會記事……（九）
山岳第二十八年三號豫告……（四）
本會事務所電話架設……（二）

不罷在候ては心得違之儀可有之、
巳來右躰々旅人は品川宿入口八ツ山下船着場限り上陸致し、神奈川宿邊迄乘船爲致候儀は堅致間敷候
文化二年、江戸町年寄三人の中の喜多村方で申渡した奉行所からのお觸で、撰要永久錄に載つてゐる。富士や大山に參詣する者共は、江戸から神奈川迄船で行くことはまかり成らぬ。それは本道筋を離れた御法度の脇往來にひとしいものだ、左樣心得て居らぬと飛んだ災難に遭はぬとも限らぬぞと喧しくいつてゐる。海道筋の泣言が 取上げになつて、一の乘物を奪はれた旅人こそいゝ面の皮である。これも今の登山客誘致に大童となつてゐる鳴物入りの宣傳にうつかりつり込まれ、出かけて見ていやな目に遇ふことがあるのと較べて見るのも一興であらう。ともあれこの觸によつても當時江戸の人が如何に大勢富士大山へ參詣したかゞ想像されやう。

芝 1.649

本會事務所へ今回電話が架設されました。
月水金 P.M 五—九
火木土 P.M 一—五
事務所開室時間を御參照の上御利用願ひます

各國山岳會の近況

黒田孝雄

會の圖書室の書棚をかき廻して得た二三の資料(註)を種にして、各國山岳會の大勢を簡單に紹介するのが本文の目的である。

各個の山岳會については、例へば英國山岳會については、小島さんが山岳 V—1 に、佛國山岳會については辻村さんが同 XI—2 に書かれてゐる等、この外に各所に取扱はれてゐるが、各主要團體の大勢については、まだ紹介される機會がなかつたやうに考へ、何かの參考にもと思つて、駄文を敢えて弄する事にした。

(註)

1 Mackintosh, A. J. .....Mountaineering Clubs, 1857. 1907, "Alpine Journal" VolXXIII. August, 1907, (No 177)

1 Dreyer, Dr Alois…Die alpinen Vereine, "Aldines Handbuch" Bd II, Leipzig, 1931

マッキントシュやドライアが『山岳會』として列擧する各國主要團體は、トウリストクラブの如きも含んでゐるがこゝにはしばらく彼等に從つてかゝる團體をも所謂山岳會と一所に取扱つて置かう。

一九三二年度山日記には、我國だけでも山岳團體の數は二〇五を越へる現狀だから、この調子で各國について、山岳團體を詳細に調査したら(しかし不可能なことだが)その數は恐らく寧想外のものだらう。今日では古臭いが、一九〇七年のマツキントシュによると、主要團體數は世界を通じて約一一〇に達し、最近(一九三〇年)のドライアーによるも、その數八二に達する。

ではこの八二個團體が世界各地にどんなに分布されてるか、假りに今それを國別にして表示して見やう。

イギリス	15
合衆國	13
オーストリア	11
フランス	5
スウイス	4
イタリー	4
ロシア	3
スペイン	3
アフリカ大陸	2
カナダ	2
チリー	2
チエッコスロヴアキア	2
ユゴスラヴイア	2
スウエーデン	1
ドイツ	1
ノルヱー	1
ブルガリー	1
セルビア	1
オランダ	1
ハンガリー	1
インド	1
日本	1
ペルシヤ	1
メキシコ	1
ノルウヱー	1
ニユージランド	1
スコットランド	1

このうち、多數の支部を有つ山岳會は何れも一個に數へられてゐるからこの點をも顧慮したならば結果は自ら異つてくるが、今の所以上で大勢を知るには充分であらう。

次に以上の團體の創立數を年次別に分類して見やう。(年次は十年毎にした)

1857—60	1
1861—70	8
1871—80	12
1881—90	7
1891—1900	14
1901—10	15
1911—20	11
1921—30	13

といふ譯で創立數は、一九〇〇年代に最多く最近はむしろ減少の傾向を有つてゐる。現存團體の大半は一八九〇年代今後に創立されたものだ。一八五〇年代における唯一の團體、之こそ最古のACなること言ふ迄もなく、次の十年間に生れた八つの團體にはSAC やCAIなどが入つてゐる譯である。

前がきはこの位にして置いて各國を一巡しやう。先づイギリスから

× × ×

英國山岳會と邦譯されるが、簡單に Alpine Club で通るのは、流石始祖だ。一八五七年十二月二十二日こそ、正に小島氏の所謂『世界最古』の山岳會の誕生日だ。五九年編輯の Peaks Passes and glaciers の二輯が同會機關誌 Alpine Journal の先驅であること餘りにも有名だが、後者は本年で卷を重ねること四十四に達する。會員資格の嚴重さも有名だか、最初一〇〇の會員は最近約六〇〇に增加してゐる。

ACに入會できない女子は別に一九〇七年ロンドンに Ladies' Alpine Club を組織してゐるし、又SACの英人メムバーが Association of British Members of SAC (1909) を組織し會員六三七に上る。他にDuOeAV流の合併をせずに、獨立せる團體が各地に相當古い歴史を有つてるなど、いかにも英國流で面白い。その主なるものを年代順に列擧すれば

1975. Oxford A C., Oxford, New Colledge.
1882. Yorkshire Ramblers' C. Leeds.
1886. Dundee Rambling C. Dundee.
1889. Scottish Mountaineering C. Edinburgh.
〃 Cairngorm C. Aberdeen.
1898. Climbers C. London,
1902. Rucksack C. Manchester,
1906. Wayfarers'C. Liverpool.
〃 Fell and Rock Climbling C, Coniston.
〃 Derbyshire Penine C. Sheffield.
1922. Cambridge A. C., Cambridge.

簡單ながらイギリスをこの位で切上げてスカヰスへ

ＡＣに次ぐ古いスウヰス山岳會(SAC)は一八六三年オルテンに生れた。現在本部はチューリヒにあつて、創立當初八に過ぎなかつた支部は三十年目には五八となり最近では八三に增加し、そのうち最大きなものはウトー、ベルン等である。會員も一九〇七年の八、四〇〇が、三一年六月には三〇、〇四四に增加してゐる。Echo des Alpes (1865—1924). Schweizer Alpenzeituug, (1883—93), Alpina (1889—1924) の三つが一九二四年以後 Die Alpen. Les Alpes, Le Alpi に合併して、機關誌として既に八巻を重ね 他に年鑑 Jahrbuch des SAC は、正に七十巻に近づいてゐる。

他に主要な團體として、

ヂュラシヤテールの Club Jurassien はSACと二年違ひの古い會だが、新しい所では小團體を合併した Fédération Montagnarde de Genavoise (1894, s. 25. m. 1.000) (註)、とベルンの女子山岳會 Schweizer Frauen A. C. (1918. s. 29. m. 2.400) 後者は英國のＬＡＣと好一對の存在だ。

(註) 以下簡單のため、例へばS. F. A. C. (1918. S. 29. m. 2. 400) と書くがこれは、一九一八年創立、支部二九、會員二、四〇〇の意味である。

× × ×

フランスに入ると、Bagnére-de-Bigorres の Societe Ramond(1865) が最も古いものだが、代表的なのは、やはりフランス山岳會 (CAF) であらう。一八七四年パリーに生れ、最近では支部四九、會員一八、〇〇〇に上る。機關誌としては Annuaire (1875—1904) Bulletin Mensuel (1874—1904) が合併されて、一九〇五年來 La Montagne が發行され現に五十八巻に及ぶ。

他に主な團體として

1875. Societe des Touristes Dauphinois. grenoble.

1892. Societe des Alpinistes Dauphinois, 〃

1897. Societe des Escursionistes Marseillais.

が擧げられる。

スペインには次の三つ

1876. Centre Excursionista de cattalunya (m. 1.300) Barcelona.

1908. Club Alpino Espanol (m. 1000). Madrid.

1913. Pénalara, Real Sociedad de Alpinismo (m. 2.700)

が主なもの

戻つて、イタリアに入ると、ローマに本部を置くイタリー山岳會（CAI）がある。これはSACと同年トリノに創立され、六七年までC. A. di Torino と稱せるもので、會員四二、〇〇〇、各地に一一〇の支部をもつてゐる。機關誌 Rivista Mensile は八二年以來既に五十一巻に上る。

他に主な團體としては、

1873. Club Mangart, Toriest

1892. C. A Siciliano, Palermo.

〃 C. Escursionisti de Jesi

等がある。

× × ×

さて、イタリーからオーストリアに入ると、ティロールのインスブルックに獨墺山岳會(DfOeAV)が本部を置いて、獨墺を一手にといふ所だ。Osterreichischer AV (1862) と Deutscher A·V (1869) とが、七三年の合併決議によつて翌七四年に一つの新しい山岳會を組織したのがこの團體である。當初會員は三、三〇〇支部は三六であつたのが、最近では、會員無慮一九三、〇〇〇支部四三九を算する盛況である。機關誌 Zeitschrift des Du Oe AV は一九三二年で既に六十二巻を發行し、月刊には Mitteilungen を發行してゐる。

O. Touristenklub (1869), G. Cebirgsrverein (1890), Wien は共に最近DuOeAVの支部となつたから、現存の獨立主要團體としては、ドイツではミルンに二九年新たに生れた Deutscher A.V を擧げうる位で、オーストリアには尙幾多の獨立團體が存在する。

1869. Steierischer Gebirgsverein, (s. 5. m. 1800) Graz,

1878. Ost. Alpenclub, (m. 1.000) Wien

1880. Siebenburgischer Karpathenverein (m. 5000) Graz,

1895. Touristenverein "Naturfreunde" Wien

1919. Turner-Bergsteiger. Wien

1920. Ö Bergsteigervereinigung Wien

1925. A. V. Donauland. Wien

等めり、最後のは最近D&OeAVから獨立せるものである。

この他、外國に滯留するドイツ人の團體として、

1897. Kamer uner A. V, Victoria

1899. Bergverein Tsingtau

} 戰爭と共に消滅す

1920/1. Deutscher Ausflugsverein Santiago & Varpalaiso

等がある。

× × ×

ハンガリー、ボヘミヤ、チエコスロバキヤ等の團體と一括して置く。

1873. Karpat-Egyesült (s. 40. m. 7.000) Budapest.

1874. Hrvatski Planinarsko Drustvo (m. 8.200) Zagreb

1925. Sljeine, Hrvatski Turistiski club (m 1.500) 〃

1924. Club Alpistu Ceskoslovenskych. Prag.

1920. Verband deutschen A. V. in T.Slo wakischen Staate (m. 7.000)

1874. Towartzystwo Tatrzanskie Krakau'

1920. Erdromika. Athena.

1899. Bulgarische Touristenklub Sofia.

× × +

ロシア・モスクワにはロシア山岳會 Russkoe Gornoe Obtschestvo (1901) がかつてあつたが一九一二年には解散し、革命以後今日迄存續するものは

1891. Krimski Gorni klub. Odessa

1902. Kaukasischer A.C, Pjatigorsk.

の二つが主なもの。新しいロシアになつて、一九二八年勞働者ツーリストクラブが組織され、その山岳部が會員約五〇、〇〇〇と云はれてゐる。

× × ×

北歐諸國並に和白には、四つの主要團體がある。簡單に一括して置かう、

1868. Den Norske Turistforening- Oslo, (m, 100.000)

1885. Svenska Turistenforening, Stockholm (m126.000)

1883. C. A. Belge. Brux. (m. 500)

1902. Nederlandsche Alpen-Vereeniging. Austerdam. (m' 800)

× × ×

以上で簡單乍歐洲大陸を終る。次にアフリカについて一言して、米大陸にうつらう。

アフリカにはかつて、次の三つの團體があつた。

1892. Club des Alpiniste. Tunis

1897. kameruner A. V. Victoria

が現在では

1891. Monntain Club of South Africa, Cape Town

1924. Natal Mountain Club. Pieter-Maritzburg

が主なもの、前者は機關誌として Journal 發行してゐる。

× × ×

大西洋を米大陸にうつる、北の方から、先づカナダではシドニーにJ A Cと同年生れのカナダ山岳會A. C of Canada. (1906. s. 110. m. 600)は、現在本部はバンフにあつて、機關誌 Journal は二十卷に達してゐる。他に

1907. British Columbia Mountaineering Club, Vancouver がある。

合衆國で最古いのは Appalachian M. C. (1876. m. 4600) で、次に Sierra Club (1892. m. 3000) であらう。この他古いものでは

1894. Mazamas, Portland (m. 700)

1898. Rocky M. C. Boulder. (m. 270)

一九〇〇年以後生れた主なものは、

1907. Mountaineers, Seattle (m. 800)

1912. Corolado. M. C. Denver. (m. 1300)

1914. California A. C. San Franisco(m. 400)

1915. Mt. Baker Club. Bellingham. N. Y.

1916. Associated Mountaineering C. of N. A. N. Y.

1617. Pennsyluania A. C. Altoova 等であらう。

メキシコには

1922. Club de Exploradores de Mexico

がある位

南米にはチリーにD n O e A V の支部をなす二つの Deutscher Ausflugsverein があることゝ前に述べた通り。

× × ×

更に大平洋を南に來るとシヤヌとニユージーランドに二つの團體がある。

1926. Nederlandsche A. V.-g. Jave

1891. New Zealand A. C. Christchurch.

最後にインドへ來る

1868. Himalayan Society, Lohare

1879. Himalayan A. C. Calcutta

の二團體は既に解散し、一九二七年九月、漸くカルカッタに Mountain Club of India が生れ、つゞいて十月會員一二七名を以て、デリーに Himalayan Club が生れ、同年十二月以後兩者合併して後の名をつぐことになつた。本部はシムラにあつて二、三の支部を有ち二九年四月以來 Himalayan Journal を發行してゐる。三一年現在の會員約三五〇に上る。

× × ×

極めて不完全な記述ではあるが、これで『山岳會巡り』を終る譯であるが、終りに大學關係の團體について一言したい。こゝに大學關係の團體というのは、アカデミシェルフヒライン で、そのうち最古い歴史を有つものは、創立間もなくD U O e A V の支部となつた A. A V. Berlin (1889)である。主なものは、

AAV. Berlin (1903 m. 700)

AAV. München (1892. m. 300)

Techniker. A. C. (1873) Graz.

Akademische Sektion des Du Oe AV., Graz (1892. m. 770.), Jena (1920) Dresden, (1901) Wien (1887) Innsbruck 1902)Muenchen (1910)

AA.V. Inns.bruck. (1893)

山岳第二十八年第三號豫告

風成雪とその雪崩に關する考察　今西　錦司

朝日山麓三面村記　高橋文太郎

小澁川荒川遡行　黒田　初子

毛猛連山行　中司　文夫

春の白山より妙法山へ　池田　知幸

北九州の山ところ〴〵(その三)　竹内　亮

背振山懐古　今泉　龍三

ウエストン氏の杖の跡　黒田　孝雄

松井幹雄氏を憶ふ　石川　孟範

谷本光彦君を憶ふ　藤島　的男

ナンガパルバット登攀概報

第四次ヒヴエレスト遠征概報

本邦山岳遭難要項輯錄　瀨木　三雄

吾妻山に於ける松枝角二氏の遭難　原田信次郎

岡書紹介、會報其他

總頁數約二百

發行期日十一月中旬の豫定

AA.C Zürich (1896)

AA.C Bern.

Club. Ak. I. (1904) Torino.

Sezione Universitoria del CAI. Nonza.

C. Academique. F.d' Alpinisme Oxford.A, C.

遭難報告に就ての希望

瀨木三雄

遭難報告が「山岳」其他の機關に公表せられる様になつたのは誠に結構な事です。然し此等の報告を拜見するに其だ要領を得て、一讀現場に在る如く思はせるものもあるし、難解にして要點を把んでないものもある。山岳に出た佐渡妙見山の遭難報告は後者の一例で、其の長い記述にも不拘、遭難死者の姓名すら書いて無い。此では遭難者も安んじて地下に眠る事は出來ないであらう。遭難の報告は讀者が其の事件に對し特別の豫備知識を持たないでも判る様(何年か後には新聞を見ない人が讀む)に書いて戴く他、次の諸項に特に注意して欲しい。

一、遭難者姓名、年令、所屬學校團隊。

二、遭難、死亡、屍體發見の確定若くは推定の年月日時。

三、遭難個處詳細(成可く圖解)。

四、同行者、案內人夫の數(並びに經驗)。

五、遭難前の行動概要。

六、遭難時の狀況(天候、溫度)。

七、遭難の原因、副因(確定若くは推定)。

八、遭難より死亡迄の本人の狀態

九、屍體檢案書の寫し。

十、捜索、救援作業の概況。

十一、遭難報告書、追悼出版物其他參考文獻の有無、名。

此だけの項が全部滿足に揃つて居る報告は仲々無いので、例へば今迄山岳に發表された中でも、年令の書いてあるのは殆ど無い。又第九の項も是非御願ひ致し度いので、檢屍が出來なかつた場合は、屍體を觀察になつた模様を書いて戴けば宜い。尙慾を言へば、報告が長文に亘るときは新聞記事程度の簡單な內容の抄錄を始めに添へて欲しい。又從來は主として致死例だけが發表されたが、たとへ不幸な結果にならないとしても相當な負傷をしたとか、或は九死に一生を得たといふ際には矢張り發表して戴き度い、參考になる事は致死の場合と異らないし、遭難者自ら手記を書き得るので正確を期し得る通俗の雜誌、新聞に遭難武勇傳を書いて、一般の人に徒に恐怖心を起させるのはどうかと思はれるが山岳の様な雜誌なれば其の憂も無いであらう。

又うつかりすると讀まなかつたり切り貼りの面倒がある新聞よりは捨てたり破つたりしない「山岳」誌上の方がよい。—生き歸つて正確な遭難手記を新聞に發表して居る人が、遭難の歴史の本では痛ましくも「空しく會津駒、密林の雪みちに、氣の毒な最後を遂げ」て仕舞ひ、お氣の毒にも生き乍らにして餘り有難くもない「紙上墓標」を立てられるといふ悲劇もある位だから。

會員章をおつけ下さい

山へ。集會へ。ルームへ。

山岳研究講話 6

今西錦司

山地生物の渡來

生物は氣候狀態に對して敏感であり、隨つて氣候の變化が延いてその土地に於ける生物相の變化を招來するに至る事は、既に前回に於いて述べた通りでありますが、これは一方から云へば同じ土地に居据つたまゝで、新しい環境に、新たに適應して行く事の出來る樣な種は甚だ少なくて、多くの種は氣候狀態の變化と共に、今迄住んでゐたと同じ樣な環境の地を求めて移動を、或ひは殖民（フロニゼーション）を開始し、もしこれが巧く成功しない時には遂に滅亡に終る經過を辿るものであると云ふ事を認めたわけであります。然る時は山地生物相の構成も、それが山岳成生の昔より、その最初の占據者の子孫に依つて連綿として繼承され、又あらゆる事變に際しても不變のまゝで、之を押し切つて來たと云ふ樣な事は考へられないのであります。

然らば現在我々の見る山地の動植物は、何等かの原因によつて、或時期に、或方面から渡來して來たものであるに相違ない。それで一通り現在分布してゐる生物の分布地域を知つておく事が必要なのである。我が國に於ける生物相を極く概觀的に申しますと、平地では大體本州の北端まで南方種が分布してゐる。之に反して北方種は山地を傳つて南の方へ延び、九州の山岳に迄分布してゐるは南方系、日本アルプスの蝶は北方系と云ふ樣に解するのであつて、本州の如く南方系と北方系とが南北から入り込んでゐる所では、兎角その分布も入り亂れて、その何れにも屬せしめ兼ねる樣な、混血種の生じてゐる可能性も又考へて置かねばならないのであります。

×

さて以上の樣な生物の分布相を以つて、生物が現在の環境狀態に對して適應を示してゐるものと考へる時之を尙も一度生態上から見直してみるのであります。例へば北方系に屬する植物の中でもハイマツの樣に、東北シベリアにその分布の中心を持つ所謂オホツク要素が、日本アルプスの高山帶にも分布してゐる。けれども日本アルプスの高山帶とスタノボイの山嶺とでは、その生態的要因が必しも同一ではない。若しもある一つの種が、相異れる生態的要因を具へた二つの生育地に分布した場合に、それらが亞種乃至は種にまで分岐した事を以つて、この二つの似て否なる環境に眞に適應した一つの證據と見做すならば、ハイマツ初め多くのオホツク要素がかくの如き適應性を呈する程度は、未だ甚だ微弱なのであります。

これらの事から考へても、分類學者の說く如く、北方要素の渡來が南方要素のそれに較べて、ずつと新しく、且その渡來を促せる原因が寒冷なる氣候の襲來であつたと云ふ事は充分首肯の出來る解釋であるけれども、唯この說を支持するに足るだけの證據も、又學說も無かつた爲、遂に今まで一つの推論以上には發展出來無かつたのであります。

こゝで最後にこの說を支持するべく、私自身の見方から一つの說明を試みておかうと思ふのであります。問題となるのはどうして寒冷な氣候の襲來を說明するかにあると思ふが地球上に於いては恐らく太古以來、赤道附近の方が極地方よりも高溫であつたらうし、又もし地球全體の氣溫が、植物帶を緯度にして二十度近くも移動さす程に冷却したものとすれば、その都度熱帶に適應した生物は行き場を失つて滅亡しなければならなくなる。それでこの說明の爲には、地質學方面にたとへ有力な反對者があるにしても、生物地理學者間では一般に承認されてゐる、かのウエーゲナーの「極移動說」を持つて來る事が望ましいのであります。

極の位置は不變のものではない。かの歐米の大氷期に相當する時期には、それはグリーンランドにあつた其后氷期からの恢復と相待つて、極は現在の位置にまで移動し來つたと云ふのであります。この有名な學說に據るならば、歐洲と東亞とで全く正反對の氣溫の變化を呈してゐた事になつて、大氷期の初め頃だと、丁度北海道が今の臺灣位の氣候に當りその后次第に涼しくなつて今日の狀態にまで至つたと云ふ事になる。併しこれだけでは尙現在よりも寒冷な氣候が、比較的近代に存在した事の證明は出來てゐないのであります。

×

東部シベリアに擴く分布する永久凍土の存在は、又別な方面から今よりも寒冷な時代のあつた事を示す、一つの有力な證據となるものであらうと思はれる。卽ち永久凍土と云ふのは、現在の夏の氣溫を以つては到底融かし切れない凍土の厚い層が、融けた表土の下に、時には數十米にも及んで存在してゐるのを云ふのであります。

かくの如き永久凍土の出來た原因として、一般に溫暖多濕であつた。太陽輻射熱增加のある時代の後を享けて、輻射熱の減少と、之に伴ふ寒冷乾燥の時代が續いた事を假定すれば容易く說明がつくのであります。そして更にもしもこれらの時代に、グリーンランドから動いて來た極が更に東してベーリング海峽に近づいてゐたものと假定したならば、アラスカ方面に分布してゐる永久凍土も同時代に出來たものと見做す事が出來、同時にこの假定は又、大氷期以後に歐洲を見舞つた處の、今よりも溫暖な時代の存在を說明する事となる。そしてこの時代と云ふのは歐洲アルプスなどでは、その樹木限界が少くとも今よりも三、四百米も高かつたと云ふのであるが、日本の山では何處に登つてもそんな跡の見られないのは、又歐洲と東亞とに於ける過去の氣候が、その乾濕では一致しても、寒暖では一致してゐなかつた事を示すものであると考へられるのであります。

既に述べてある樣に、輻射熱增加の時代には、地方によつては雪が顆

しく降るからして、或ひはこの後氷期の一時期に、日本アルプスの小氷河は育くまれたので無からうかとさへ想像されるが、積雪の增加は永久凍土の出來る爲には不利な條件であり又かゝる氣候狀態の時は常に地方的な氣候の差違が甚しくなるものであるから、この時期を以つて直ちに北方系要素の壓倒的な侵入時代と解する事は出來ないのであつて、解り易く云ふならば、かゝる時期には正常な帶狀的分布相に對して、モザイック的分布相が一時的に現れて來るのであります。それ故北方系要素即ち山地生物の侵入は、この後に續いた寒冷乾燥時代、即ちシベリアの永久凍土が初めて、大範圍に亘つて出現したであらう時と、その期を同じうするものと解するのが、最も適切であらうと思ふのであります。

かくの如く說明するならば、其后極が現在の位置に復歸した爲に、歐洲の方では又少し寒冷となつて、樹木限界も現在の高さに下降したが、東亞の氣候は之と反對に次第に溫暖となつて、本州の平地は再び南方系要素の分布する所となつた。併しまだ永久凍土を融かし切る迄には恢復してゐないと云ふのが、現在の狀態と云ふわけになるのであります。又降水量の方はどうかと云ふに、高層濕原（ホウホモア）がすつかりその成長を止めて了ふ樣な乾燥狀態は過ぎ去つて、現在では再び輻射熱量の增加とともに、或程度までの濕潤な狀態に戻つてゐるとは、これ一般に認められてゐる處なのであります。（續）

以上　不充分乍らも、私の初めに意味した山の素性、乃至は山の履歷と云ふ樣な事に關しては、一應理解して貰へた事として、引續き現在見る狀態に於ける山の事象を如何に取扱ひ、又如何に解釋して行くべきかと云ふ事に就いて述べ樣と思ひます。今迄の處は云はゞ概論であり、又前篇に相當するのでありますが、私達小學校以來受けて來ました敎育法の大部分に於いては、常にかくの如き概論は之を後廻しにして、いきなり各論的な個々の事象をつめこまれたものであつた。これらの個々の智識はその量から云へば相當なものであるべき筈だが、何時も試驗が濟めば取りとめなく散逸して了ふ。そこで私は山と云ふ自然の一部を、それ自體として研究しようと云ふ爲には、先づ之を時間的と空間的との兩方面から、總括的に見透して行かねばなるまいと考へて、概論的な敍述から出發したのでありましたが、之に就いてこの試みが果して成功だつたかどうかを、私は今非常に知りたく思つてゐるのであります。

會員名簿を近く作成致します。

住所に變更のある場合は御通知願ひます。

山の消息

臺灣より

臺灣旅行の序を以つて南湖大山々彙の山旅をいたし候。九月十日臺北州羅東郡シキクン蕃社を發ち、ムロフ、ゲリロー、ハトノフ、ゴンゴバユーの新ルートを經て南湖大山に入りブナツケーロベースキャンプを置き、四日間附近の一萬尺級を大方登りつくし申候。

南湖大山東峯（一二一二二尺）とマピーサン山（一〇四五〇尺）との山稜上には石灰山より成る見事なる無名峯二座あり、その一は總督府山林課員の通過せし形跡あれど他の銳き岩峯（一萬尺余）には蕃人以外登頂の形跡なく、我々一行快哉を叫びバボー・タウサンと假稱するに決し候。石灰岩の山は日本には珍らしくあかぬけしてまことに宜敷きものに候。

同行者は臺灣山岳通達の士、會員鹿野忠雄君にて同君は專ら生物採集を目的とせられ、傍小生と共に氷蝕地形の觀察をいたされ候。今回の山行により臺灣に於ける既往の氷河の確證を得大喜に候。

二十日小生は下山、鹿野君は改めて次高山彙に山旅をつゞけらるゝ筈に御座候。今年は先づ〳〵天候に惠まれしと云ふ可く候（臺北州羅東郡ピヤナン蕃社にて九月二十日）

田中　薰

清津川西澤溯行

佐武流山白砂山

九月八日　晴　赤湯（八時）—セバト川出合（九時）—西澤出合（一〇・一〇）—佐武流山嶺線（三時、附近岩碎れ易し）—三角點（四時）—赤土居山佐武流鞍部野營（五・一〇）

九月九日　晴　野營地（六・三〇）—赤土居山（八時）—白砂山（九時此間、芝地にて水たまりあり好宿營地）—八十三山（一〇・四〇）—野澤池東端（一二・〇〇）—同南端小屋（三時）

九月十日　野反池—草津

清津川西澤はセバト合流點以後本西澤分岐點より瀧五つあり、大して惡いことはありません。佐武流の北部に突き上げてから野反池までは一貫して藪、藪の連續で相當です。白妙から野反池迄は僅かに切分の殘跡が認められます。白砂附近にはいゝ野營地が相當有ります。羚羊は非常に多い樣で數度みかけました。

（明峯山岳會　內藤八郎）

登山團體調查

秋田湯澤山岳會（A・A・C・Y）

a秋田縣雄勝郡湯澤小學校　b佐藤威士　c昭和八年四月創立　d十名　e會誌「山岳行」（隨時）、東北山岳の研究並びに紹介

武藏高工山岳部　山日記記載中變更あり、人員四〇名　代表者門田傳三と訂正（大森區北千束町）

門司山岳協會　a門司市西本町一　b古垣內所一　c昭和六年八月　d二十二名

三重高農山岳部　a三重縣津市上濱町　b野知里敬助　c昭和六年　d六〇名　e機關誌「錫杖」不定期

新設山小屋

栂池ヒユツテ

位置白馬岳東麓神の田圃早大ヒユツテの西南千二百メートル。早大ヒユツテ栂池との約中間。

所有者信濃四ツ谷白馬館

收容百名　設立昭和八年拾月十五日　建坪平坪廿五坪の三階建　小屋番十二月十五日ヨリ四月三十日迄滯在　小舍料未定。小屋に至る經路森上驛より六時間。猿倉スキー小屋—三時間半。大池　三時間。

秋山のニュース

ガイドの收入（大毎富山版八月廿六日）富山營林署の調查によると、富山縣大山村、芦峅、白萩村、內山村合計二百三十八名の案內者の夏の案內料の收入一人平均は三十二圓（一日二圓）となる。尙組合の規定で順番制度であるが、山岳家と愛意ある者は指名され收入は多い。

富士山の登山者總數（東京毎月八月廿七日）本年七月一日より八月廿七日まで　四七、六六一名。昨年に對して五、三四三名の增加。

奥穗高の遭難（信濃毎日十月十七日）農大山岳部員鈴木保衞氏十五日

奥穗高岳川側コブ屋根にて墜死。

北海道日高に氷河の跡（東京日日九月二十七日）佐々保雄氏は日高山脈を踏査の結果ポロシリ岳其他に約卅個所のカールを發見す、追て詳細發表の由。

後立山の遭難（信濃毎日十月十九日）三菱鑛業會社員國澤武氏（二七）は十月十七日鹿島槍の南槍にて飢と寒氣の爲死亡す。一行三名案内者も同行せり。鹿島川より冷池小屋を經て唐松に行く計劃なりしも、冷澤及鹿島槍の二ケ所にて雨及雪のため余儀なき露營と、食料の缺乏による遭難なり。

冬山の會（第三回）東京ＹＷＣＡ體育部山岳會主催、同講堂、十月三十日夜、講演＝冬山に就いて（櫛有恒氏）山岳寫眞の撮し方（塚本閣治氏）映畫＝上信國境、上越國境、歐洲アルプスの登山スキー

圖書紹介

陸地測量部新刊目錄

五萬分一地形圖　修正

日光	一五號	藤原	長野	一五號	和田
東京	一〇號	青梅	長岡	七號	出雲崎
高田	九號	柿崎	村上	二號	大島
高山	二號	信濃池田	村上	三號	朝日岳
斜里	一一號	屈斜路湖	福島	一二號	郡山
盛岡	七號	川井	富山	二號	糸魚川
名古屋	一〇號	御在所山	金澤	五號	金澤
松江	一二號	米子	〃	一〇號	小松

（昭和八年八月三十日）

五萬分一地形圖　新版

富内	一二號	愛郎	泊居	四號	榮濱
〃	一五號	富内	〃	八號	白鳥湖
〃	一六號	富内湖	〃	一二號	內淵川本流
〃	一五號	追手	〃	一六號	樺太野田
中知床岬	六號	皆別	〃	九號	遠淵
〃	七號	乳根	〃	一〇號	彌滿
〃	一一號	札塔	〃	一三號	樺太長濱

（昭和八年九月三十日）

五萬分一地形圖　修正

斜里	五號	斜里	〃	六號	斜里岳

千島の氣象に關する文獻

「山岳」第二十七年第二號所載千島の文獻記事中に氣象に關するものなきを見出され、參考までにとの手紙と共に中央氣象臺の荒川秀俊氏より左の報告を寄せられた。

一、中央氣象臺月報及年報（中央氣象臺定期刊行物）

一、氣象要覽（中央氣象臺定期刊行物）

一、日本及隣邦氣候圖（中央氣象臺發行）

一、本邦氣候表（中央氣象臺發行）

一、曆（東京天文臺發行）

一、H. Okada: Climate of Jaron（中央氣象臺發行）

一、北太平洋の氣象（海洋氣象臺發行）

一、日本風土記（中央氣象臺發行）

一、海洋時報（海洋氣象臺刊行物）

一、氣象集誌（大日本氣象學會刊行）

千島群島氣象一斑　下野信之　第十四年（明治廿八年）六〇七頁

北海沿岸流氷調査　豐倉鎗吉　第廿五年（明治廿九年）一八一頁

九春古丹港の結氷　野田爲太郎　第廿五年（明治三九年）二六五頁

千島列島沿岸流氷　岩波常景　第廿三年（明治廿七年）五四頁九三頁

一、海と空（海洋學會刊行）

千島列島沿海溫度表に就て　神尾秀二　第十一卷一四一頁

中部千島の氣候　神尾秀二　第十二卷　一一一頁

一、氣象雜纂（中央氣象臺刊行）

大正十三年に於ける沿岸結氷並に流氷去來調査報告　沙那測候所　第三卷六三頁

沙那近海結氷及流氷狀況報告　沙那測候所　第三卷一九七頁

大正十三年千島列島の氣象　神尾秀二　第三卷四二八頁

山想　4.（一九三三）　法政大學山岳部

一九二九年第三號を發表した本誌の第四號が久し振りに發行された。內容並形式共に何の云ふべきを持たない。一般の學校山岳部がもつ報告と異ならない。

たゞ同校並山想會の建設による毛度澤の小屋の報告は將來クルプヒュッテを持たんもののよい參考資料とならう。

本誌の大部分を占める山岳部ぴ山想會の記錄はまた、ゆつくり見たならば面白い參考ともなり、思ひ出ともならう。（くろだ生）

立教大學山岳部々報　5

昭和八年六月三十日發行、頒價六〇錢　本文四十四頁　記錄廿九頁　寫眞六葉

山岳をめぐる行爲と精神（辻莊一）

冬の後立山縱走（湯淺巖）三月の鹿島カクネ里附近（小原勝郎）春の毛勝三山（奥平昌英）一月の北岳（山縣一雄）

一九三二年四月より一ケ年間の動靜が第五號の年報として編輯されたものである。主なる登山記錄が四編本文として揭げてあるが、簡潔であり、充分に讀み答えのある內容を持つてゐる。最早や今日に於ては部厚な、そしてなくもがなの紀行文を滿載する部報の時代ではないようだ。

年報の部は集會と登山記錄を分け記錄の配列は日を追つて纏められゐる。近頃よく見受けられる地方別に分類する編輯よりこの形式の方に賛成する。

この年の活動が物語る如く、寫眞には立派なのがある。（角田）

會務報告

九月定例理事會報告

九月十四日午後七時、本會事務所

出席　小島、武田、高野、高頭、冠、鳥山、槇、松本、茨木、神谷、角田、黒田

一、登山經歷表の件　研究續行の事

一、山岳第三號編輯の件

一、高山深谷發行の件、三版を重ね好成績、これを以て高山深谷編輯委員の解散を報告

一、山小屋建設の件、建設につき研究調査の經過を報告する、研究の具體的方法は改めて山小屋委員にて付議に決す

一、事務所電話架設の件可決

一、會計報告

一、理事改選の件、滿期となるべき理事六名（內一名補充、一名關西）につき協議、尙同時に滿期となる會長副會長常任評議員の件は來月二日の評議員會役員總會にて決定すること。

評議員會報告

十月二日　三會堂にて

出席　小島、武田、高野、高頭、中村、木暮、冠、鳥山（委任三名）

一、近藤、三枝、田部三評議員任期滿了の處、再選重任に決定。

一、新に横有恒氏を評議員に選任。
一、小島、武田、高野、冠、槇の六氏を常任評議員に決定。
一、鳥山評議員は都合により評議員退任の申出あり承認。

役員總會報告

十月二日　三會堂にて
出席　小島、武田、高頭、高野、木暮、鳥山、中村、冠、槇、松本、角田、中原、茨木、伊藤、額田、黒田（委任、三枝、津田、高橋）
一、會長副會長任期滿了に付選任の件。
席上銓衡委員を選任の上、高頭氏を會長、木暮氏（他一名交渉中）を副會長に推薦の處、滿場一致可決す。

十月定例理事會

十月十二日本會務所にて
出席　小島、高頭、木暮、槇、角田、神谷、茨木、額田、
一、豫算編成委員を決定し、その協議により編成をなすこと。
一、理事六名改選につき協議を重ねたり。
一、關西小集會には理事出張の筈なりしも都合により中止に決す。
一、十一月二日小集會、角田理事司會とし、幻燈會をなすこと。
一、洞澤小舍の雪崩調査に關し、槇角田兩氏より報告あり、十四日より角田、茨木、額田の三理事洞澤へ出張に決す。

新着圖書

ケルン　四—五、	朋文堂	
山小屋　九月號	同	
寫眞月報　九、十月號	小西六本店	
ツーリスト九、十月號	ジヤパン・ツーリスト・ビユーロー	
國際觀光　四號	國際觀光局	
霧の旅　二十四號	霧の旅會	
黒木立　九十號	關東岳愛會	
山彦　九、十號	東京山彦山岳會	
山行案内　同　昭和マウントクラブ		
山　十月號	横濱山岳會	
ケルン　六號	TCC山岳會	
獨立樹　九號	東京山旅クラブ	
岩雪崩　二七、二八號	イムペリアル・マウント・クラブ	
旅　十月號	東京アルカウ會	
旅路　十月號	關東旅行クラブ	
旅行　九、十月號	東京旅行クラブ	
ジヤパンピ・パ　アク・スキークラブ會報　六號		
がくれい會々報　二三—二四號		
日本登高會々報　二四—二五號		
登歩趣味會々報　六號		
明峯山岳舍々報　十六號		
東京みなかみ會々報　八月號		
東京登歩溪流會々報　九號		
旅の趣味會々報　九月號		
東京市山岳部パンフレツト　九、十號		
丸善山岳部々報　二〇號		
山と溪の會々報　八、九號		
旅　五號	東京鐵山岳會	
山嶺　九、十號	東京野歩路會	
山旅　二號	八王子山岳會	
山幸　二六、二七號	阪神山岳會	
京都山岳　九月號	京都山岳會	
管見錄　九月號	大阪管見社	
ペルク　二二號	岡山山岳會	
ペデスツリヤン　十月號	關西徒歩會	
アルカウ趣味　十月號	日本アルカウ會	
神戸アユモ會々報　九月號		
R・S・C部報　十月號		
廣島山岳會々報　十月號		
臺灣山岳彙報　九月號		
樂園ワンダーフォーゲル十月號		
歩跡（滿十週年記念號）　テクリ會		
辻占と戀（川柳集）　東京山旅俱樂部		
岩登り術、水野祥太郎著　黒百合社		
The Mountaineer Vol.XXV No.9/10 Aug./Sept. 1933		
Bulletin Appalachian Mountain Club Vol.XXVI No.II/12 Aug./Sept. 1933		
Aug./Sept. 1933 Bulletin Centre Excursionista De Catalunya		
Any XLIII Num.458/459 Juli./Agost 1933 La Montagne No.250/251 Juillet 1933		
Rivista Mensile del Club Alpino Italiano Vol.XI Num.8/9 1933		
Unione Ligure Escursionisti Anno 20 No.6/7 1933		
LE Berggids No.3 Juli 1933		
Die Alpen Vol.IX No. 7/8 Jul./Aug.1933		
The Mountaineering Journal Vol.1 No.5 Sept./Nov. 1933		
The Geographical Journal Vol. LXXXII No. 1/2 Jul./Aug. 1933		
Sierra Club Bulletin Vol.XVIII No.4 Aug. 1933		

會員寄贈圖書

木本光三郎編吉野群峯　高野鷹藏氏
地震　八、九月號　木村鐵吉氏

英國山岳會へ寄贈幻燈板目錄

1	冬の十勝岳	河田黨
2	嚴冬の十勝主峯	島田巽
3	大砲岩	河田黨
4	冬の岩手山	櫻井敏夫
5	樹氷藏王山	角田吉夫
6	藏王地藏岳	長澤壽三
7	雪の大朝日岳	櫻井敏夫
8	乘鞍頂劍ケ峯	山田應水
9	乘鞍より見たる槍と穗高	田中薰
10	北穗高岳	小林太刀夫
11	穗高屏風岩	小林太刀夫
12	穗高涸澤	角田吉夫
13	冬の槍	角田吉夫
14	十月の槍ケ岳	冠松次郎
15	鹿島鎗ケ岳	逸見眞雄
16	雪の淨土山	山田應水
17	冬の立山	椙山正雄

13 カクネ里と北鎗北壁 小原 勝郎
19 毛勝 岳 奥平 昌英
20 結氷のみくりケ池 中野 甚吉
21 五日の劔岳 鳥山 吉端
22 萬太郎山 角田 吉夫
23 山中湖畔 故松井 幹雄
24 雪の裏不二 鳥山 悌成

特に積雪期のもの二十四枚を選んで英國山岳會へ寄贈することゝなつた次第である。右は十月初旬發送の運びとなつてゐるが、彼地に到着の上は、渡米中の本會理事松方三郎氏がイギリスに廻り、親しくこの幻燈板について説明せられる豫定である

山小屋建設に關する報告

穂高涸澤池ノ平に於ける山小屋建設計劃本年度事業の概要を報告せんに去る四月二十六日より同三十日に至り角田、本郷、今西、初見、柴田槇の諸氏より成る調査委員一行は涸澤豫定地點に出張同處の積雪並に雪崩の狀態を調査せり。積雪は去秋其の岩壁下に建てたる十七尺の標識は全く埋沒せる程度にて岩壁面のみは高さ約五間横幅約六間程露出せり。同地點に懸りたる雪崩の痕跡は認められず且つ岩壁上積雪上に現はれて生えたる「ダケカンバ」の年輪も數十を數へ過去及當時に於て大なる雪崩ありしことを强いて想像し難し。唯各委員調査の結果は同地點の位置上より奥穂高、涸澤及北穂高北尾根一帶より受くる斜面は雪崩の杞憂あるものと認めたり、此調査に基き理事會は愼重審議の上本夏より工事に着手すべき豫定を延期し更らに一積雪期間雪崩の調査を繼續すべきことに決し、其の方法として雪崩の危險ありと想像する方向約六ケ所を選び其方向に對し直角に交はる位地に約三十尺の丑字型標識を建立し本積雪期間の結果を調査することとせり其の準備の爲め去る九月二十三日二十四日角田理事は松本及上高地に出張し、更らに十月十四日より十八日まで四日間、角田、茨木、額田三理事は右標識建設の爲め涸澤豫定地點に出張せり。

日本山岳會有志晩餐會記事

中秋の名月とまでは行かないがそれに近い月がのぼり、上野の山から夕暮の鐘がひゞきわたる頃には、この池の端の世界別館には、有志が弗々參を現はして來られた。結局十八名の顔が、重ねる杯と牛鍋のほてりとからホンノリト赤くなつた頃には山の思出話に、自己紹介にかなりのピッチが上つた、この處世話人面喰はざるを得なかつた。參々伍々別れたのは九時前であつたが、有志の有志で各二次會を開かれたらしい。

尙當日、舊い志村氏の顔も高頭さんの御紹介で見えた。小島、高頭兩氏の見えなかつたのは淋しかつた。

次回の世話人は槇、茨木、角田三氏に御願ひすることになつたが、世話人が世話人だけに何んな型をとるか、恐らく見物であらう(黒田記)

出席者

飯塚篤之助　茨木猪之吉
冠松次郎　加藤保一
木村鐵吉　槇有恒
岡埜德之助　酒井忠一
佐藤誠次郎　高頭仁兵衛
鳥山悌成　角田吉夫
山本幸次郎　吉田竹志
志村寛　塚本繁松
田邊主計　黒田孝雄

編輯後記

十月號が月の最後日にやうやく會員諸氏の手にお届けするとは洵に編輯者として申譯ない事です。穂高の涸澤へ雪崩調査標を建設に出かけたのが第一の原因となつてます。

内容の充實は先ず第一に諸兄の御投稿に因るものであります。隨筆、研究、消息は勿論、注文があれば大いに伺ひ度いと思つてます。

十一月二日の小集會は「懐古の夕べ」として先輩の思ひ出話を承り、當時の興味ある幻燈を親しく説明していたゞく事となつてゐます。多數御出席を願ひます。

事務所に電話を架設すべしとの意見は可成り久しいものでしたが、今回やうやく實現された事は大きな欣びです。芝一六四九を「イロヨク」と讀めば、直ぐ記憶するとか、一會員の寄せられた申出を、附言しておきます。(角田)

昭和八年十月二十八日印刷
昭和八年十月二十九日發行
發行者 角田吉夫
編輯印刷人 額田敏
東京市芝區琴平町二 不二屋ビル
發行所 日本山岳會
電話芝一六四九番
(印刷所 川崎活版)
社 槇 恒 謹
廢告一手取扱
電話四谷五六一番

日本山岳會編 一九三三年板
高山深谷
高級なる山岳寫眞及隨筆集
四六倍判寫眞五〇特枚型隨筆百頁 四圓五十錢 送料三十三錢
再刷出來

豫告
初刷御購需の方には正誤表を差上げます。甚だ勝手ですが書房へ直接御申越下さい。

豫告
ウォルター・ウェストン著
田部重治校閲 岡村精一譯
日本アルプス 登山と探檢
四六判約四百頁 寫眞約二十五枚
定價未定
十二月一日刊行
田部重治序
小島烏水跋
槇有恒跋

山岳雜誌創刊豫告
梓
暫定誌名 昭和九年一月創刊
急募誌名 一、十一月十日限
二、採用誌名に對しては薄謝を呈す。
三、適當なる誌名を得ざる時は「梓」と定む。
東京神田駿河臺一丁目 電話神田二七七五番 振替東京七八六四四番
梓書房

山の思ひ出に
懐かしく織り込まれる……

森永チヨコレート

一ケ●五銭●十銭

美津濃ノスキー.靴.豫約開始

スキー　御用意のシーズンです。スキー●スキー靴は御使用前の完全なる御手入が肝要です。故に御準備は一時も早くなさる事を御奨め致します。**十月十五日**より新製の下記ヒツコリースキー及びスキー靴の豫約を致します。共に御希望通り御製作申上ます。
總て新入荷品と共に、別室に陳列致してございますから係員にお申付下さい。

神田小川町　**美津濃**　銀座五丁目